

図書館職員に関する専門職論の再検討

明野 ひかり

図書館関係者は、1960年以降、図書館職員が専門職論であるかどうか、あるいは専門職に近づくためにはどうしたらよいかについて議論してきた。このような図書館職員の専門職論について、長期に渡って議論が行われてきたにも関わらず、採用と配置は一部で認められるにとどまり、いまだ社会から専門的な職業として認められているとは言い難い。ここから、議論の成果が得られていないのは、議論の方法自体に問題があったためではないかという疑問が生じる。

関連する文献には、図書館職員や研究者が、図書館職員の専門職論を、どのような目的で、どのように論じてきたか、という観点から分析を行ったものは少ない。また、他の職業と図書館職員の専門職論を比較した研究がきわめて少ないため、図書館職員の特性が十分に把握されてこなかった。

本研究の目的は、これまでの図書館職員の専門職論を振り返り、議論の方法の問題点を明らかにすることである。そのために、図書館職員の専門職論を整理し、教員の専門職論との比較を通して、これまでの議論に欠けていた点を検証した。教員を比較対象として設定した理由は、教員と図書館職員の専門職性の比較が既に行われており、研究の糸口にしやすかったためである。

研究方法として文献調査を用いた。調査の結果、まず、学校教員の専門職論の特徴として、①専門職に関する理論を基盤に議論が進められていること、②議論の根本として専門職を目指す目的について議論されていること、③職業の特性を踏まえ、独自の専門職論の構築を試みていること、④専門職運動によって待遇改善が行われたことを評価し、次の段階へ向けて、これまでの運動の功罪を再検討していること、が明らかになった。次に、教員の専門職論を通して、図書館職員の専門職論を分析し、その特徴を明らかにした。

両者の比較を通して、図書館職員における専門職論の問題点を以下の5点にまとめることができた。

- (1) 専門職化の目的について議論が行われていないこと。
- (2) 専門職に関する理論を基盤に議論が進められていないこと。
- (3) 図書館職員独自の議論構築が行われていないこと。
- (4) 重要な指摘を行っている文献を基に議論を深めていないこと。
- (5) 専門職化の提案に具体性がないこと。

今後有意義な専門職論を行うには、これらの問題点を改善することが必要であろう。

(指導教員：葉袋秀樹)